

まえがき

未亡人の可能性が出たあなたに届けたい。

わたしは、2022年2月、49歳のとき25年連れ添った同級生の夫を天国に見送りました。亡くなる約2年前のこと、47歳の夫が突然すい臓がんで余命半年とも3カ月とも告げられて一瞬にして人生が暗転しました。まったくもって予定外の出来事でした。人生に上り坂や下り坂があるのは知っていましたが、「まさか」という坂に遭遇してしまったのです。

余命宣告を受けて泣きました。だけど泣いたのは初めだけ。夫に諭され泣くのはいつさいやめました。その後はいい最期を目指して夫と二人三脚。1年10カ月頑張つて理想的で感動的な看取りができました。幸せに逝ってもらえたと思います。そのちは自分の人生の役目をほぼ終えたような若年寄ならぬ若隠居の心境で過ごしています。それほどの資金はないけれど気持ちだけはセミリタイアをした感覚です。

夫がこの世から姿を隠して1年ぐらい時間が経ったころ「添いとげようとする既婚者のおよそ半分がいずれ未亡人になる」という事実が気がつきました。わたしのことを気の毒だ、かわいそうと優しくしてくださいる方。その方々もいつの日かかなりの確率で伴侶を見送り未亡人になるのです。わたしはその事実にも1年間も気がつきませんでした。それはそれなりに夫をなくした悲しみにどっぷり浸っていたのかもしれませんが。また、それと同時にわたしのことを真剣に慰めてくださる人も、明日はわが身とは思わずに「いつの日か自分も伴侶を亡くす」と現実をどこか他人事のように感じていることもわかってきました。

わたしの場合50歳前に未亡人になったので、自分より先に伴侶をなくしたという友人や知人はいませんでした。夫が余命のある状態になってからは友人・知人との交流はほとんどしなくなり、闘病記を綴るわたしのブログの中で励ましや情報をいただいています。活字の中に込められた優しさや思いやりは何度救われたかわかりません。今回はその恩返しというわけではないですが、比較的早めに未亡人になったわたしが闘病く看取りくおひとりさま生活、そのなかで伝えたいと思うあれこれを思いつくままに正直に綴った本を書きたいと思い

ました。

この本は伴侶を失うかもしれない可能性が出てしまった方、すでに伴侶をなくしてしまつたという方にぜひ読んでほしいと思います。それから若い現役のご子息・ご息女を自分より先に見送つたという親御さん、そして、これから結婚される若い人にもぜひ手に取つていただけたらと思います。それから、少し厳しいかもしれませんが、余命を宣告されたご本人さんにも読んでいただきたいとも思っています。幸せな最期とその後の家族の暮らしに思いを馳せながら読んでいただけたら幸いです。

どうであれ、この先もわたしの人生は続きます。少しでも幸せな「いのちの時間」を過ごし夫に冥土の土産にする面白い話をたくさん持つて逝きたいと前を向いています。これを読んだ方が消えゆく命と向かい合う苦しみや悲しみの中でも、あたたかな幸福感を見いだせるのだということに気づいてくださるとうれしいと思います。